

# 「烏山ネット・わあ〜く・ショップ」

## ～住民と行政の協働によるバリアフリー整備を実現させる継続的取り組み～

烏山ネット・わあ〜く・ショップ世話人代表 福永順彦

### <特徴>

- ① 固定的なメンバーによる団体ではなく、地域を良くすることを目的として、興味がある人が集まる「場」として機能している。
- ② リーダーは置かず、区と区民からなる 13 名の世話人会によって運営されている。
- ③ 区民と区職員（土木、建築、まちづくり、健康づくり、出張所など）の横断的で幅広い参加者で構成されており、職員の出席率も高い。
- ④ 「出来ることから実現しよう」「行政への一方的な要望・要求の場としない」「言い出した人が中心となってプロジェクトに関わる」をルールとして身近なまちづくりの問題に取り組み、具体的なハード整備につなげている。

## 1. 「烏山ネット・わあ〜く・ショップ」とは

### (1) 活動の特徴

#### ①活動の主旨

「烏山ネット・わあ〜く・ショップ」は、住民参加でつくった「烏山地域ユニバーサルデザイン推進地区整備計画※」（バリアフリーのまちづくり計画）を実現させたいという区民の思いを受けて、計画のアフターフォローを継続して行うことを目的としてスタートした取り組みである。

※計画策定時は「烏山地域福祉的環境整備推進地区」という名称であったが、平成 19 年に世田谷区が「世田谷区福祉のいえ・まち推進条例」を改定し「世田谷区ユニバーサルデザイン推進条例」とし、推進地区の名称もあわせて変更した。

#### ②メンバー構成

烏山ネット・わあ〜く・ショップは、固定したメンバーによる団体ではなく、「烏山を住み良いまちにする」という共通の目的を持った人が集まる「場」として機能している。スタート当初は、計画策定のワークショップに参加した区民と区職員であったが、上記目的に賛同する人は誰でも参加できるようにしており、現在、住民 20 名行政 10 名、全体で 30 名程度が何らかの形で関わっている。

#### ③活動・運営形態

会の活動形態は、月 1 回の定例会が基本となっている。定例会では、解決したい問題や、自分の活動の中で困っていることなどを持ち寄り、活動の経緯や経過の報告、意見交換、情報交換を行っている。

参加者へは、行政への要求・要望ではなく、まちを良くするという共通の目的を持って知恵を出しあうこと、自らが行動をすることをお願いしている。

烏山ネット・わあ〜く・ショップに代表はおらず、会を運営するために 13 名（うち行政 3 名）からなる「世話人会」で定例会の議題や、会として共通して取り組む課題、イベントなどを決める。事務連絡などは現在、世田谷区烏山総合支所街づくり課にお願いしている。

## (2) 経緯

### ① 始まりは行政の計画策定ワークショップ

世田谷区は5つの地域に「総合支所」を置き、地域行政を進めている。「世田谷区ユニバーサルデザイン推進条例」では5つの地域で「ユニバーサルデザイン推進地区（以下推進地区という）」を設け、地域ごとに推進地区の整備を進めている。

区では、平成11年度にユニバーサルデザイン推進条例の前身である「世田谷区福祉のいえ・まち推進条例」に基づき推進地区の計画づくりを実施した。

「推進地区」の計画づくりにあたり、烏山総合支所では独自の進め方をとった。推進地区の中でまちの動きがある場所に絞って「先行整備地区」を位置づけ、狭い範囲の計画づくりを毎年継続していく仕組みをつくった。いわば重点地区の中にさらに小さな重点地区を位置づけたのである。これによって時々の状況にあわせてきめ細やかな計画がつけられるとともに、ワークショップが毎年行われることで住民と行政の関係が継続的に続くことになった。

### ② 「アフターフォロー活動」の展開

平成11年の最初のワークショップの結果、いくつかの整備が実現した。その過程で住民の中に「自分達の意見が整備に具体的に反映されてうれしい」という気持ちが生まれた。また、行政の職員も住民からお礼を言われ「こんなに喜んでもらえるなんて」と、住民との連携によるまちづくりの意味を再認識するようになっていった。

しかし、2年目にワークショップが開催された際、住民から「1年目の実現していない問題点を残したまま、次の場所の計画をつくっても良いのか」との疑問が出された。難しい課題はいつまでたっても進まない、との厳しい声もあった。

このような状況の中で、2年目の計画策定ワークショップが終わる頃、「まだ実現していない問題を我々でフォローしてはどうか」という提案が出された。そこで、積み残した課題に取り組むアフターフォロー活動が3年目から開始されることになった。

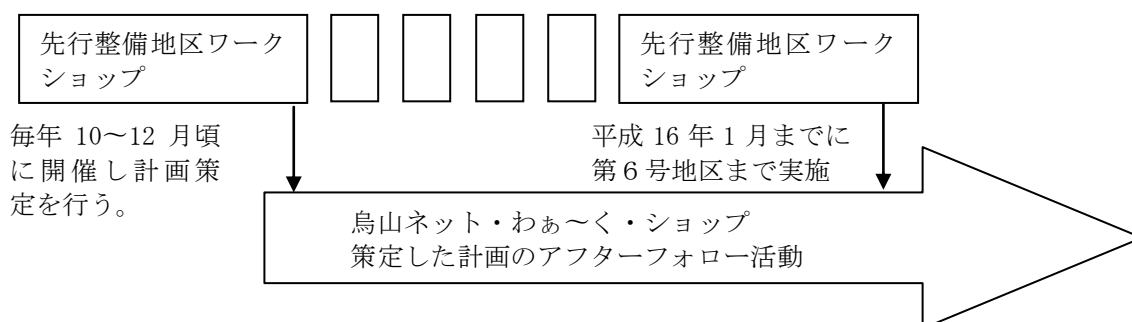


図 ワークショップとアフターフォロー活動による推進

## 2. 祖師谷公園～駒沢大学前バス停周辺の整備

### (1) 整備の経緯

烏山ネット・わあ〜く・ショップの活動で整備が実現した代表例として、バス停の改修と都立祖師谷公園の園路の整備がある。

少し古い事例であるが、住民と行政の連携による整備が実現した最初の例であり、烏山ネット・わあ〜く・ショップの横断的な連携の特性が良く現れているので紹介したい。

平成13年の定例会で住民から出された課題のひとつに、幅員が狭く、歩道がないのでなんとかしたいと言われている道路の一角があった。また、車いす利用者からもバス停が狭く

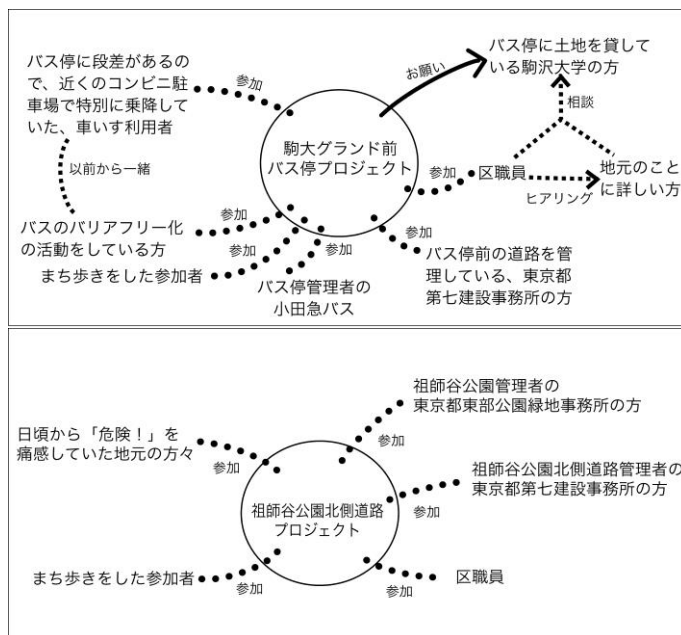
段差があるので、近くのコンビニ駐車場で乗り降りできるようなバス会社をお願いしているとの発言があった。

しかし、この道路は都道であり、隣接する祖師谷公園も都立公園である。また、バス停は、小田急バスが駒沢大学から提供してもらい、借りている場所であった。

従来なら、それだけで無理だと決めつけてしまう状況であったが、ネット・わあ〜く・ショップとしてお願いしてみようということになった。烏山総合支所土木課の職員と地元の協力者とともに、駒沢大学野球部の監督へ相談に行ったところ「地域のためなら」ということで協力いただけることになり、ネット・わあ〜く・ショップと町会の連名で駒澤大学と東京都に対して要望書を提出した。

その結果、敷地は駒澤大学から無償で借り、舗装やフェンスは区が整備、ガードパイプや縁石は都が整備し、バス停の上屋やベンチは小田急バスが整備するという連携がとられることになった。

一方、バス停をはさんで道路の反対側に位置する祖師谷公園側では、東部公園緑地事務所と第七建設事務所によって公園敷地を活用した歩道状の園路の整備が実現することになった。ここでも東京都の担当者にミニワークショップや定例会に参加してもらうとともに、ネット・わあ〜く・ショップから要望書を提出した。



ミニワークショップ (H13. 8)



住民も参加して検討

図 整備関係者のネットワーク

## (2) 整備の特徴

### ①バス停の改修

整備にあたっては、近所に在住する車いす利用者との調整を行うとともに、このバス停の利用者が所属している市民グループ「バスから地域交通を考える会」の協力を得て、以下の点に配慮した整備を行った。

- 1) バス停にバスが正着しやすいよう、上屋柱とガードパイプを歩車道境界から距離をとって設置し、運転者の心理的負担とならないようにした。
- 2) 上屋柱の位置が、バスの乗降口と重ならないように配慮した。

既存の樹木を残すことや借りられる敷地の幅などの制約がある中で、利用者の要望と整備側の調整が難しい場面もあったが、区民（利用者）、行政、事業者が前向きに検討を続ける中で、かなりの改善提案が実現していった。



駒澤大学グラウンド前バス停の改修

## ②園路の整備

バス停の改修とほぼ同時期に、道路の反対側にあたる祖師谷公園の園路整備も完成し、歩行者が連続して歩けるスペースが確保されることとなった。

当初公園の敷地を道路と一体として整備することは難しいのではないか、という意見もあったが、東京都東部公園緑地事務所に打診し、ミニワークショップで現場を確認してもらうことで、その必要性を理解してもらうことができた。

車道側のガードパイプと縁石の整備は第七建設事務所が整備することで調整がなされ、バス停の整備との相乗効果が得られることとなった。



祖師谷公園の園路整備

## (3) その後の事例

この整備の成果によって、住民と行政の連携による活動の意義と効果が再認識され、会への参加意欲が高まった。

それによって、段差解消や音響信号機のボタン位置の改善など細かな整備にも連携の手法が活かされることとなった。

すなわち、まちのバリアや課題について利用者からの情報提供が「定例会」に出され、プロジェクトチームと称する検討グループを立ち上げ、関係所管や住民が一緒になって現場の検証や必要な提言などを行い、整備につなげる、という流れである。

平成 25 年には、京王電鉄が所有する地下通路の改善につながった。この事例では自転車と歩行者が利用する地下道が暗く、自転車に乗ったまま通行する人が多いので危険であるとの住民からの指摘を受けて、区から京王電鉄に相談をし、協働で整備を実施した。



通路を明るくし、一方通行、階段の段鼻をはっきりさせる、カーブミラーを設置するなどの整備で通路を安全にした。

### 3. その他の展開と今後の課題

活動は、ハード整備にとどまらずにソフトの取り組みや、まちづくりの関連団体の立ち上げなど、多様に展開することとなった。

平成17年～26年までは、小学生を対象としてユニバーサルデザインを普及するための「スタンプラリー」や、広域避難場所に障害のある人も行けるように検討した「誰でも災害避難村」などを実施した。



ユニバーサルデザイン体験隊スタンプラリー



誰でも災害避難村

活動の開始から15年を経て、現在でも新たな参加者があり、まちづくりに積極的にかかわれるこの活動を楽しんでいるように見える。参加者相互の理解も深まる中で、ここでの出会いがきっかけとなった様々な地域活動が生まれている。

しかし、ハード整備を中心に地域の現状を見ると、実現した整備がある一方で、依然として歩道が未整備の道路があり、駅前には違法駐輪が減らないなどの未解決の課題が山積している。時間がかかるまちの整備に対して、住民と行政が一緒になって、さまざまな立場から知恵を出し合える「場」をいかに継続させ、発展させていくかが、今後の大きな課題といえる。

現在も進行中のこの取り組みの評価は、今後どのようにこの活動が継続して展開するかにかかっているといえる。

#### 参考文献

- 1) 烏山ネット・わあ〜く・ショップ編『できることから実現しよう!』世田谷区 2011.3
- 2) (社)土木学会土木計画学研究委員会 監修/交通エコロジー・モビリティ財団、(財)国土技術研究センター 編 『参加型福祉の交通まちづくり』学芸出版 2005.2